

このたび私は [Unearthed] (発掘展) に関連したワークショップへの出席のため、セインズベリー日本藝術研究所より英国に招待されました。

ハリッジでの [Unearthed] の展示会は、昨年 2009 年に大英博物館で行われた [The Power Of Dogu] (『土偶の力』展) に引きつづき行われたものです。

これら二つの展示会は、セインズベリー日本藝術研究所副所長であるサイモン・ケイナー氏により監修されました。

今回私に示されたテーマは「現代芸術と縄文土偶」であり、その趣旨は「“JOMON” アートは現代にどのように生かされているのか」という問いへの答えとして、「日本を代表する現代の縄文アーティストの縄文造形論と作品」を提示するというものです。



ハリッジ市立コミュニティセンター



セインズベリー視覚芸術センター

《2010年8月23日》

□イーストアングリア大学 セインズベリー視覚芸術センターにて

11:00 ~ 13:00 ワークショップ参加者全員で土偶展見学

14:00 ~ 17:00 討論会 (参加者 20 人)

- ・土偶展の目的と成果について
- ・古代におけるヒト形の役割について
- ・展示とその効果について、等

□ハリッジ市立コミュニティセンター ミレニアムフュージョンルームにて

18:00 ~ 19:30 レセプションとワークショップ (参加者 30 人)

19:00 ~ 19:30 ワークショップにて猪風来講演会

通訳 Dr. サイモン・ケイナー (セインズベリー日本藝術研究所副所長)

□ライブラリーにて

19:30 ~ 23:30 公式晚餐会

この日の昼、ワークショップに参加する専門家らによる討論会に出席しました。

その後のレセプションとワークショップにおいて、私による「猪風来講演会」が行われました。

会場には日本から持参した作品5点（縄文野焼き作品『妊婦』、新法曾焼作品『大地の雫』、漆塗り土偶『縄文ヴィーナス』など）が並べられ、作品を観た入場者の方々からは「ファンタスティック」など感嘆の声が聞かれました。

そして参加者らの間では“Japanese JOMON”についての話題で盛り上がっておりました。

そうした各国の学者や専門家、セインズベリーの関係者など約 30 人を前にして、作品や創作課程のスライドを交えて講演をはじめました。

まず主催者を代表してサイモン・ケイナー氏より挨拶があり、猪風来美術館（新見市法曾陶芸館）館長、また縄文アーティストとして参加者らに紹介されました。

英国考古学の第一人者であるケイナー氏は日本語も堪能であり、そのまま私の通訳をして頂きました。

講演内容は、

1. 縄文土器・土偶制作の道に入った動機と技法復活について
2. 北海道の大自然の中での縄文スピリット体験と創作
3. 今日の、岡山県新見市での縄文法曾陶の創作

スライドで写真が映されるたび、“Fantastic, Wow!” など歓声があがりました。

とくに『生命のシリーズ・出産』や『土夢華シリーズ』などには会場全体から感銘の声があがり、また新法曾焼の『大地の雫』に対して「本当に美しい、素晴らしい造形だ」などと言われました。

これは自分自身でも驚くほど大きな反響でした。

各国の学者や英国人の方々は、心から作品を受け入れてくれました。

彼らとの話でわかったのは、“JOMON” や “DOGU” といった呼び名はもはや日本語から国際用語となっているということです。

質疑応答では「竪穴住居での暮らしや山の中での断食など縄文体験による精神と、作品創作のプロセスと、造形の迫りに圧倒される」との賛辞を頂きました。

講演はたいへん好評で、ワークショップの盛り上がりと成功を彼らとともに喜びました。



土偶展（同行した新潟県立博物館の宮尾氏と）



専門家らとの討論会（写真中央がサイモン・ケイナー氏）



レセプションパーティー



ワークショップにて猪風来講演会

《2010年8月24日》

□セインズベリー日本藝術研究所 メインミーティングルームにて

10:00 ~ 13:00 討論会

- ・日本とバルカン半島における土偶の比較
- ・現代芸術との比較・影響
- ・ヒト形、土偶の出現する理由（何を表現しているか、造形法と意味）

15:00 ~ 17:00 フリント（火打石）の石器づくり

指導 ジョン・ロード氏



フリント（火打石）の石器づくり



石器づくり（写真左がジョン・ロード氏）

この日私たちは実験考古学の実践として、フリント（火打石）の石器づくりを行いました。

講師はジョン・ロード氏で、石工職人である彼は英国一の石器づくりの名人でもあります。

この石は日本では見られない、英国などヨーロッパ独特のものでした。

石器づくりの技法は石を造形する人類最初の創作技法であり、ロード氏の技は素晴らしいものでした。

技法を実践し体感的に学ぶというのは、参加者へ大きなインスピレーションを呼びさますものです。

《2010年8月25日》

10:00～14:00 ノリッジ・キャッスルミュージアム（ノーフォーク州立博物館）

16:00～17:00 スー・モーフ氏自宅にて 5000の土偶の野焼き見学



野焼き見学（写真中央がスー・モーフ氏）



野焼きされた土偶

このたびの[Unearthed]（発掘展）ではチケットとして小さな本物の土偶が使われていました。

その土偶チケット5000点を野焼きしたのが、陶芸作家であるスー・モーフ氏です。

私たちは彼女の自宅へうかがい、スー・モーフ流の野焼きを見学させていただきました。

野焼きの色彩である土と炎の色合いは、同行した各国や英国の専門家らにとっても魅力的なものだとのこと。紅茶とケーキを頂きながら話を交わし、縄文野焼き技法などについて語り合いました。

こうして感じたのは、縄文などの持つ自然の色彩や質感や造形が今、英国をはじめヨーロッパにおける美的感覚の潮流となっているということでした。

《2010年8月26日》

9:00～10:00 セインズベリー日本藝術研究所にて打ち合せ

10:00～11:00 ギャラリー「ART 1821」にて猪風来作品展示
8月28日～9月4日



ギャラリー「ART 1821」

一連の会合の第四会場となったギャラリー「ART 1821」は、ノリッジ市中心部にあり、

“Unearthed, Rebirth”（発掘、再生）をテーマとした展示場です。

ここで、私の作品をギャラリーに展示することになりました。

ギャラリーのオーナーから、「ギャラリーはロンドンやキプロスなどにもあり、ぜひこの素晴らしいあなたの縄文作品の展示をしたい」と申出もありました。



縄文野焼き作品『妊婦』



漆塗り土偶『縄文ヴィーナス』



新法曾焼作品『大地の雫』



セインズベリー日本藝術研究所への大門前にて

『発掘』展 ワークショップ

日時 8月23・24日

【主な出席者】

- ◆イローナ・バウシー博士 2005年に英国ダラム大学で博士号を取得。彼女は東アジア考古学の専門家で、ライデン大学(オランダ)で講義をしています。
- ◆アンドリュウ・コクラン博士 ヨーロッパの新石器時代を調査・研究し、2006年考古学の博士号を取得。この時以来、彼はカーディフ大学において、イギリス先史時代と人間の起源について教えています。
- ◆ドラゴス・ゲオルギュー教授 文化人類学、実験考古学者。東ヨーロッパの石器・鉄器併用時代の研究をしています。
- ◆ダン・ヒックス博士 ボストン大学講師。近世考古学の研究者。彼はまたセントクロスカレッジやピットリバー博物館の研究者の一員でもあります。
- ◆ダニエラ・ホフマン博士 カーディフ大学の考古学博士号を取得。彼女は現在、オックスフォード大学の考古学研究所で働いています。主に、中央ヨーロッパ新石器時代の初期農耕社会について研究しています。
- ◆サイモン・ケイナー博士 彼は、日本の芸術と文化の研究をしているセインズベリー日本芸術研究所の副所長。日本の縄文文化などを研究している考古学者です。
- ◆ジョージ・ラウ博士 彼は、アメリカ特に南アメリカ、中央アンデスの芸術と考古学の専門家です。
- ◆宮尾亨氏 新潟県立歴史博物館の学芸員。日本の縄文考古学が専門です。
- ◆溝口孝司博士 九州大学大学院比較社会文化研究院、基層構造講座の准教授。
- ◆ステファニー・モーザー教授 地域の博物館の展示などにおいて、考古学的な表現を視覚的なプレゼンテーションを通して行うことを専門にしています。
- ◆永瀬史人氏 青山学院大学卒業後、東京都の学芸員として働いていた。現在、セインズベリー日本芸術研究所の研究者。
- ◆サシャ・プライユ氏 2009年9月大英博物館において中国・韓国共同の学芸員として参加しました。彼は主に中国の新石器時代初期から唐までの彫刻研究をしています。
- ◆コリン・リチャーズ博士 1991年グラスゴーから講義を始めた。彼は今、ラパヌイ(イースター島)の記念物の研究プロジェクトに参加しています。
- ◆矢野健一教授 立命館大学で日本考古学の研究をしています。彼の研究テーマは縄文文化の研究やその時代の人口の変動、西日本の生活様式の変化などです。
- ◆猪風来氏 縄文造形家。猪風来美術館館長。